

来ふらり77

読書で広がる知の世界

行為を生むもの

山野井泰史氏は、世界各地の雪・氷・岩の壁を単独で登るというスタイルを開拓してきた、現存する最強の登山家です。『垂直の記憶』(山野井泰史著 山と溪谷社 2004)はその自伝、『ソロ』(丸山直樹著 山と溪谷社 1998)と『凍』(沢木耕太郎著 新潮社 2005)はそれぞれの著者がインタビューを基に書き上げたノンフィクションです。「なぜ山に登るの」という昔からの問いに対する答えが見つかるだろうか。本人の著書を読むのが一番確かかもしれません。山に向かう気持ちが記されています。丸山・沢木両氏も山野井さんが山に登る理由を分析しています。しかし正直なところ私自身は理解できたとは言にくいのです。

数あるトップアスリートの物語の多くは、主人公がそのスポーツに打ち込む理由を解き明かすことです。大半のスポーツは見られることが目的の一つであり、それを見ている我々も共鳴・共感し、その動機も「わかる」という気になります。それに比べると登山は、その本番を見る観客はいませんし、本人も見られることを想定していません。いつまでたっても「なぜ山に登るの」という問いが繰り返されます。でも、ここで「わかる」と思っているスポーツについても「わか

る」と思っているのは本当か」と考え直してみましよう。スポーツに限らず、他者の行為の動機を理解するとはどういうことなのだろうか。自分自身のそれは理解し、説明できるものだろうか。謎です。

図書館長 荒川 一郎 (物理学科教授)

古典という深淵と『春の雪』

三島由紀夫、シェークスピア、プラウトゥス

昨年秋に映画化されたことでも知られる『春の雪』は、三島由紀夫の長編四部作『豊饒の海』の第一部である。『豊饒の海』は、『春の雪』の後注において三島自身が綴っているように、(平安)後期物語の『浜松中納言物語』をその典拠としたものであり、同作品における転生思想を20世紀前半の日本社会の文脈において見事に再生させている。『春の雪』のクライマックスにおける聡子の出家は、『源氏物語』における浮舟の末路を直截に想起させるものでもある。『春の雪』は、流麗かつ耽美な三島文学の真髄を余すところなく伝

えるものであるとともに、古典を咀嚼し再生させるといふ作業の持つ意味とそのための前提的素養とを十分に認識させる作品であると言える。

古典に向き合うということは、ルネッサンスにおける古典古代の学問的伝統への回帰をもって例証させるまでもなく、「教養」の一つの範型である。シェークスピアの最初期の詩作品『ルークリース陵辱』は、ローマ共和政の成立の契機となった同事件に関する一つの文学的解釈である。モリエールの喜劇『守銭奴』は、古代ローマにおけるプラウトゥスの『金の小壺』 この作品自体が、ギリシャ喜劇という一つの古典のローマ的再

構成である を素材としたものである。このように古典を軸として果てしなく広がる教養の世界は、この上ない思弁的刺激や知的興奮に満ちている。『春の雪』において垣間見ることのできる古典への眼差しは、我々が体得していくべき「教養」の姿をも鋭く見据えているのではなからうか。

法学科助教授 石川 博康



デジタル・ライブラリ・サービスの活用

大学に入学して自由にキャンパス内のコンピュータや図書館を利用する権利を得た皆様には、是非とも大学図書館が提供するデジタル・ライブラリ・サービスを十分活用して頂きたいと願う次第であります。私は経済学部所属ですが、コンピュータサイエンス分野の出身であり、専門であるデータベースの研究のひとつとしてデジタル・ライブラリの研究もしておりました。現在のこの分野の技術の進歩はすばらしく、昔、「こういうふうの本を検索して読めたらいいのに」と私が夢見ていたことは殆ど実現され、それ以上のサービス機能がインターネットの普及とあいまって次々と具現化されています。

従来、われわれ研究者は既存研究の調査のため、研究室いっぱい国際会議の予稿集や論文誌を保管しておく必要があったわけです

が、今では殆どがデジタル化されてインターネットを介して閲覧可能となりました。20年以上前に書いた自分の論文でさえ、その学会のどなたかの手によりスキャンされてデジタル・ライブラリとして公開され、それを目の前のコンピュータ画面で読めるという事実に対し、データベース研究者として深い感慨を覚えます。何と便利な世の中になったことでしょう。ありがたいことです。

私が皆様に望むことは、必要な書物を迅速かつ的確に発見できるように検索の達人になってほしいということです。大学図書館は、新聞や論文誌のアーカイブ、百科事典などのライセンスを購入して学生の皆様へサービスを提供してくれています。是非、ご活用ください。

経営学科教授 白田 由香利

独断 新読書の勧め

書林という言葉がある。書物の森林から新入生に推薦するとすれば、何がいいか？教養主義の古典といわれた岩波文庫から一冊読んでレポートせよ、というのが私の期末試験の課題である。すると意外な効果がある。ふだん学生が到底読みそうもない、トマス・モアの『ユートピア』のレポートを提出したりする。今の学生は書林に入り込んで、道に迷い、暗がりに恐怖したり、樹冠からこぼれる日差しに安堵する経験が必要だ。まずはコーヒー二杯分くらいのお金で買える文庫本とか新書を電車の中で読む通学の友としたらどうだろう。

推薦図書リストは巷にあふれている。従って不偏不党など考えず、以下は私の専門分野からの独断と偏見の推薦リストである。『ポストコロニ



アリズム』(ロバート・J・C・ヤング著 岩波書店) 紛争の現場を検証した本書を読むと、ポスト植民地時代の現在の世界の構図が見えてくる。世界史の勉強意欲を昂進する効き目あり。『日本の文化ナショナリズム』(鈴木貞美著 平凡社新書) 日本の近現代文化の歩みを概観できる。日本の現代史の足元を見直す第一歩としてお勧め。『茶の本』(岡倉天心著 講談社学術文庫) 日本茶道の神髄を語り、日本文化を世界に知らしめた名著。浅薄な英会話にのみ憧れる学生に明治の偉人の達意の英文を見せて恥じ入らせる効果あり。『タイム・マシン』(H・G・ウエルズ著 岩波文庫) 読書とは時間を旅することと悟らせてくれる世界初のSFの傑作。

英米文学科教授 橋本 横矩



忘れられていた三島由紀夫エッセイ

昨年女子部図書室で、旧制高等科時代の昭和23年10月に学習院演劇部が創刊した雑誌『氷山』創刊号を再整理していたところ、三島由紀夫氏の“説明役について”と題するエッセイが掲載されているのが分かった。この雑誌はガリ版印刷の手製で、三島氏の他に坊城俊周氏、鈴木力衛先生が顧問となり、武者小路実篤氏等が幹事になるなど錚々たる人々が名を連ねていたが、惜しいことに創刊号のみで終刊になったらしい。学内の会誌であったためか、このエッセイの存在は当時の在学生など一部の人だけが知るのみで、これまで公になっていなかった。同エッセイは、ギリシャ演劇のコロスや歌舞伎のチョボの役割を論じた原稿用紙にして3枚程度の短いもの。三島氏はこの年、作家として自立する決心を固め当時の大蔵省に辞表を提出するなどひとつの転換期を迎えていた。黄ばんだ鉄筆文字からは、後輩たちにエールを送る氏の心情が伝わってくるようだ。なお同エッセイは、『決定版三島由紀夫全集別巻月報』(新潮社)に収録される予定。



女子部図書室 / 中山 高二

Q. 著作権って何？ 大学生にも関係あるの？

A. 著作権とは、学術・美術・音楽などの文化的な創作物(著作物)を創作した人(著作者)に認められる様々な権利の総称で、著作権法という法律によって保護されています。原則として、著作者に無断でその著作物を利用することはできませんが、一定の条件を満たせば、著作者の許可がなくても利用することが出来るようになっていきます。

大学生の場合、授業で使用する資料をコピーしたり、レポートなどで参考となる論文を引用したりと、著作物を利用しなくてはならない機会がたくさんあります。このQ&Aを参考に、ぜひ著作権を身近な問題として考えてみてください。なお、著作権侵害は立派な犯罪行為ですので、ご注意を。

Q. 図書館で資料をコピーするとき、何に気をつければいいのか？

A. 高校時代からコピー機のお世話になっていた人もいるかと思いますが、実はコピー(複製)も著作権法で保護されている権利の一つです。コンビニなどでのコピーは、私的利用として認められる範囲であれば自由に行うことができます(TV番組の録画と同じ)が、図書館でのコピーについては、調査・研究の目的であること、著作物の一部分(半分を越えない程度まで)であること、一人につき一部であること、という3つの条件を満たさなくては行うことが出来ません。これらの注意点は図書館のコピー機前にも掲示してありますので、図書館でコピーをする際には必ず確認してください。

Q. 雑誌の記事をコピーしたいのですが...？

A. 雑誌には様々な執筆者による記事や論文が掲載されていますので、雑誌1冊を1つの著作物とするのではなく、掲載されている記事や論文を1つの著作物として扱います。そのため、コピーできるのはそれぞれの記事や論文の一部分だけということになります。

ただし、次号が発行されている(最新号ではない)、最新号が発行されてから3ヶ月以上が経過している、という条件のいずれかを満たしていれば、雑誌に掲載されている記事や論文の全てをコピーできることになっています。



「来ぶらり」のバックナンバーは大学図書館ホームページ (<http://www.glim.gakushuin.ac.jp/>) で公開しています。

来ぶらり No.77 2006年4月1日発行

発行責任者：荒川一郎 編集委員：生田陽子・工藤晶子

学習院大学図書館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

☎03-3986-0221(代) 内239㍿(ファクス) 内239㍿(閲覧) 03-5992-100㍿(閲覧直通)